

# 競技力向上を推進するまでの現状把握とその分析

～中高連携に関する実態調査を通して～

宮崎県 宮崎県立延岡商業高等学校

田 中 真 二

## 1 はじめに

宮崎県高等学校体育連盟の調査研究委員会は、高体連会長指名が6名、県内6支部から1名ずつ、計12名で構成されている。本委員会は前回、平成20年度「普及・活性化」について研究発表し、経験の浅い運動部顧問へのハンドブック作成をし、現場に還元するなどの取組を行った。この発表が、研究委員会のあるべき方向性として評価していただき、その翌年には、今後の全国調査研究委員会の新しい取組を示す、パイロット研究の先駆けとして全体会において研究発表する機会をいただいた。

このような研究を基盤として、平成21年度から、「競技力の向上」をテーマとして研究に取り組んでいく。

## 2 主題設定の理由

本県の全国大会等での活躍をみると、学校部活動所属の選手が中心になっており、競技力向上における中高での運動部活動の果たす役割は大きいといえる。しかしながら、学校の実情により、専門外の競技を指導せざるを得ない状況や、教師の指導力及び生徒の競技力向上につながる効果的な取組が県内に十分浸透していない状況も見受けられる。

このような状況を改善するためには、教師の指導力及び競技力向上に有効な取組について、広く啓発し、普及していく必要がある。本県ではその具体的な取組として、教師の相互連携によるスキルアップ、生徒相互の磨き合いや高め合う機会が競技力の向上にも有効だと考え、中高連携への取組に焦点をあてることとした。

そこで、今後よりよい中高連携の在り方を提言するために、本県の中高連携の現状を把握し、その問題点を見出すとともに、本県でも、全国レベルで実績を残している競技団体や中高連携に取り組んでいる学校の実情等から、今後につながる中高連携の在り方を提言するために実態調査及び分析を行うこととした。

## 3 研究の仮説

### (1) 仮説1

中学校の運動部活動が抱える問題点や指導者の意識調査を通して、実態を把握することにより、今後の中高連携の在り方や効果的な実施についての方向性を見出すことができるのではないか。

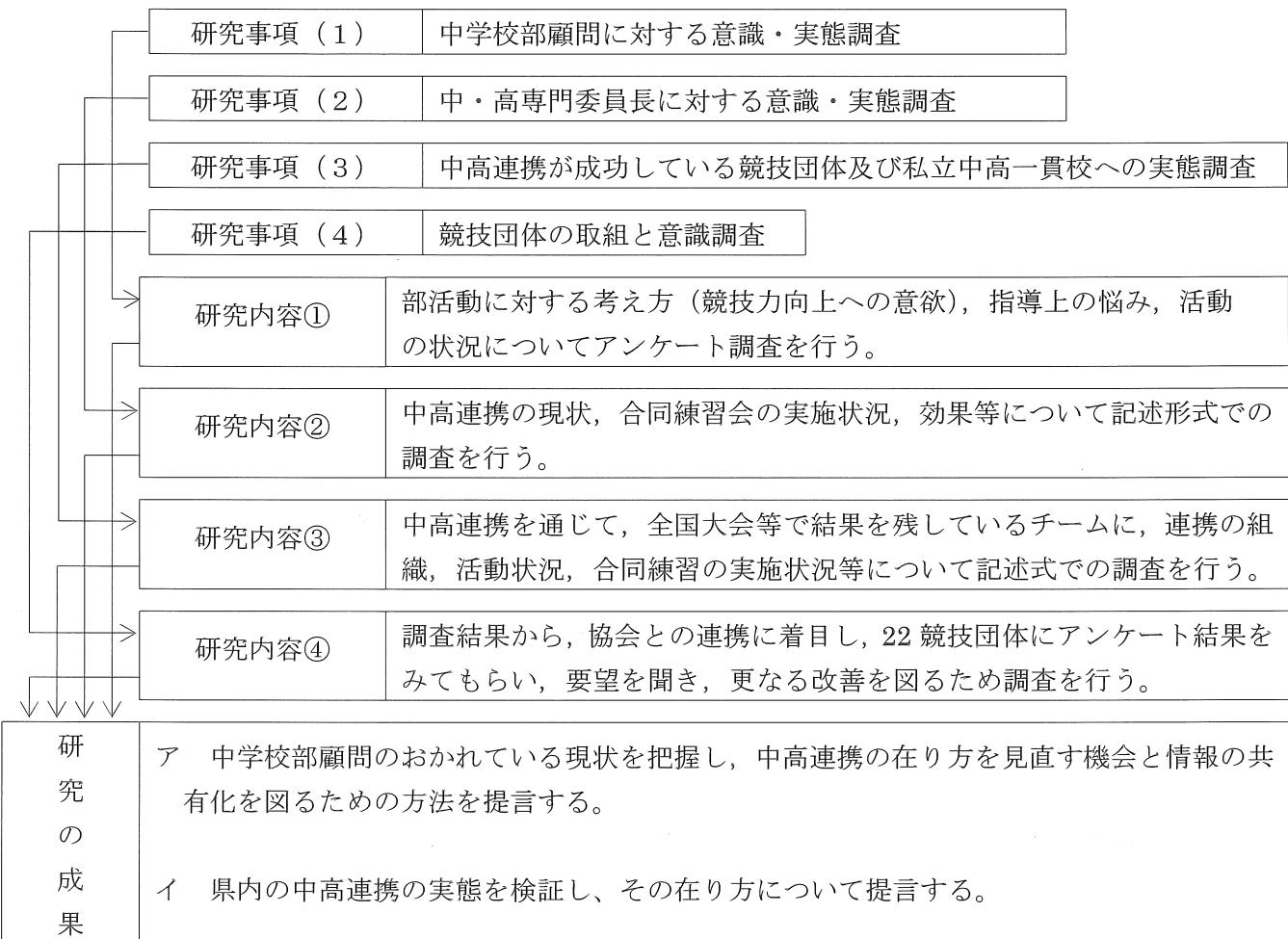
### (2) 仮説2

本県の競技種目で全国入賞を果たしている競技団体や中高連携に取り組んでいる学校への調査を行うことにより、強化につながる中高連携の在り方を探ることができるのではないか。

### (3) 仮説3

競技団体（協会・連盟）の取組や意識調査を通して、現状を把握することにより、中高連携の改善すべき点を見つけることができるのではないか。

#### 4 研究の構想



#### 5 研究の実際

##### (1) 中学校部顧問に対するアンケート調査

□調査対象：県内の中学校運動部顧問

□回答者数：右表

□調査期間：平成 21 年 8 月 29 日～平成 21 年 9 月 15 日

□調査方法：アンケート（記号・選択及び記述方式）

	男性	女性	合計
運動部顧問	248 名	42 名	290 名

##### (2) 中・高専門委員長に対するアンケート調査

□調査対象：県内の中学・高校の各競技専門委員長

□回答者数：中学校 19 名・高校 31 名

□調査期間：平成 21 年 11 月 12 日～平成 21 年 11 月 27 日

□調査方法：アンケート（記号・選択及び記述方式）

##### (3) 中高連携が成功していると思われる学校・競技団体に対するアンケート調査

□調査対象：ハンドボール・新体操・ウェイトリフティング（小林地区）、ソフトボール（日向地区）、

体操（延岡地区）の高校部顧問

□ウェイトリフティングについては中高連携の取組はしていないとのこと

□回答者数：高校指導者 5 名

□調査期間：平成 22 年 7 月～8 月

□調査方法：アンケート（記号・選択及び記述方式）

#### (4) 私立中・高併設校に対するアンケート調査

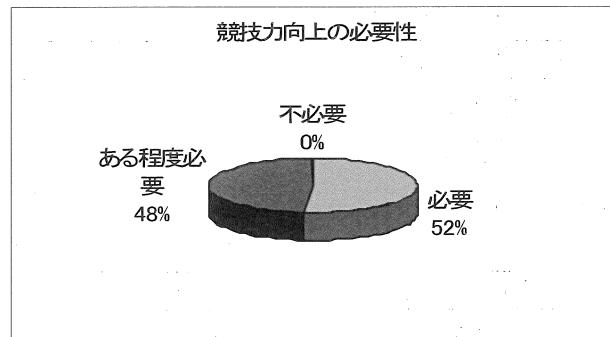
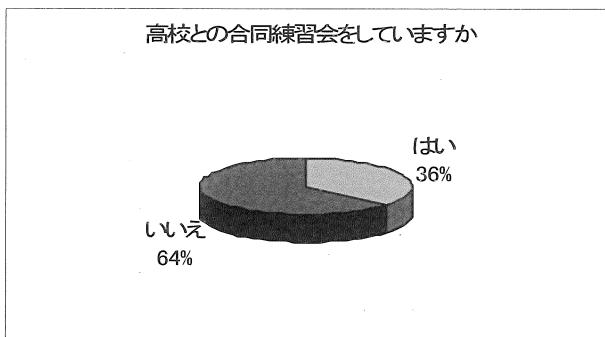
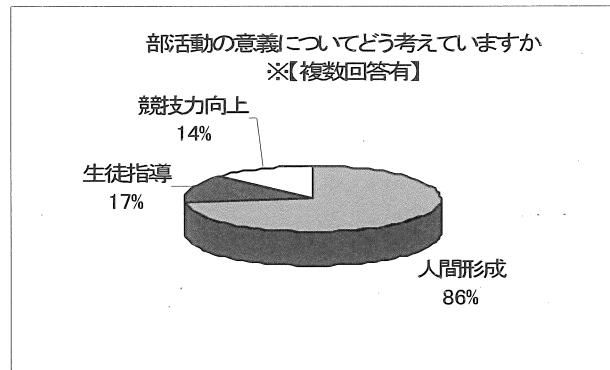
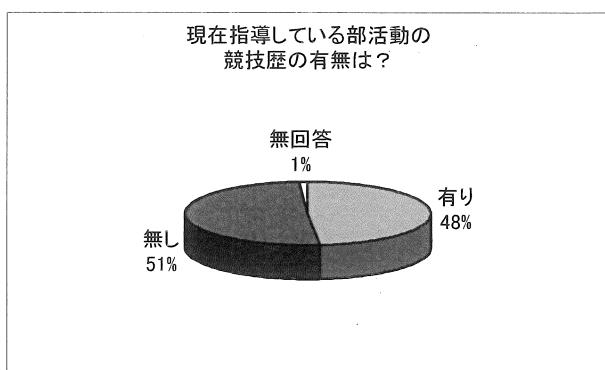
- 調査対象：県内の中高併設校部活動顧問
- 回答者数：高校 5 校 7 競技
- 調査期間：平成 22 年 9 月～10 月
- 調査方法：アンケート（記号・選択及び記述方式）

#### (5) 各競技団体・協会に対するアンケート調査

- 調査対象：競技団体
- 回答者数：22 競技
- 調査期間：平成 23 年 4 月～6 月
- 調査方法：アンケート（記号・選択及び記述方式）

## 6 アンケート調査に対する結果と考察

### (1) 中学校部顧問に対する意識・実態調査



考察

中学校では特に、部顧問自身の競技経験を活かした指導ができない状況が半分以上あると考えられる。意見をみると、「専門外（未経験）の種目で指導しにくい」、「技術指導に不安」といった回答や「保護者からのさまざまな期待」について、指導未経験種目の部活動に携わる部顧問が悩みを抱えていることが伺える。また、「部活動の必要性について」は、不必要と答えている指導者は皆無で、ほとんどの指導者が必要であると答えている。しかし、「部活動の意義」については、「競技力向上」よりも「人間形成」、「生徒指導」の場として捉えている指導者の方が多いことが伺える。

これらの結果をみると、現場で指導上の悩みを抱えつつも、部活動の必要性、意義については共通認識が図られている。しかし、競技力向上については、必要と 52%が答えていながら、高校との合同練習会をしているのは 36%という現状であり、何らかの手立てを講じる余地があるのではないかと考える。

## (2) 中高の専門委員長に対する中高連携の実態調査

### ○実施形態および現状

- ・競技によって実施形態は違う。試合形式、合同練習、指導者・審判研修など。
- ・県外の指導者を招聘している競技も多くある。

### ○指導者が中高連携の成果と感じているもの

- ・団体、全国大会、九州大会での入賞。
- ・強化選手の競技力向上だけではなく、底辺の底上げとしての成果も多いにある。
- ・交流、意識の変化、新しい情報、指導者の指導技術の向上などさまざまな成果がある。

### ○複数の競技で共通する課題

- ・日程調整が難しい。適当な宿泊施設、練習施設。(費用、規模、受け入れ体制)
- ・中学生と高校生の体力体格差。(これについては考え方の問題か?「差」を問題と捉えるか、普段と違う経験のできるチャンスと捉えるか)自分よりレベルの高い相手と練習できる中学生にとってはよい経験だが、高校生にとっては得るもののが少ないと考えている指導者もいる。

### ○望ましい在り方について

- ・競技によって違う。その競技の実態に応じた形式を模索する必要がある。(個人・団体・球技・格技など種目の特異性、個人の体格差、運動能力差など様々な差異がある)
- ・中学校には部活動のない競技もある。学校数、競技者数の多い競技と、少ない競技との差がある。

### 考察

中高連携の実態をみると、定期的に練習を行っている競技は少なく、ほとんどが年1、2回という回数に終わっているようである。しかし、指導者は全国大会の入賞だけでなく、中長期的な視点での中高連携の必要性を成果として実感しているようであった。共通する課題として、日程や施設の問題が多くあげられていた。

これらの結果をみると、中高連携の必要性は十分に理解されているが、実施するまでの課題も多く、定期的な活動ができていない競技が多くみられた。実施の重要性と、現実的な問題(環境、日程、体格差、競技特性)の狭間で十分な活動ができていないことが伺える。

## (3) 中高連携が成功していると思われる競技団体への調査

### 考察

結果を、競技力向上に不可欠と思われる、施設などの環境的要因、選手・指導者などの人的要因、強化費などの経済的要因別にまとめてみた。環境的要因や経済的要因では、限られた場所、限られた予算の中で満足しているとは言い難い状況がどの団体からもみてとれた。しかし、共通して言えることは、人的要因において各団体が独自の取組をし、協会や保護者との連携を密にした取組をしていることが伺えた。特に、小林地区のハンドボール競技においては、転勤に伴う指導者不在校への対応など、中高指導者と協会との関係が非常にうまくいっているのが伺える。また、小林秀峰高校の指導者は、さまざまな事業等(トップアスリート事業等)において、全県の小中学生に指導をしており、小林地区だけでなく、地元小林を大事にしながらも、宮崎県全体を常に考えているのが伺えた。

このように、協会との連携を図ることが、より望ましい中高連携の在り方に近づくのではないかと考える。つまり、人的要因(人のかかわり方)に競技力向上、普及への手立てがあると考えられる。

[参考] 小林ハンドボール協会へのアンケート結果（抜粋）

人的要因 （人とのかかわり）	協会とのかかわり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・協会スタッフは指導・競技が経験未経験を問わず、ハンドボールに関わるようになった人を非常に大事にする。その結果、ハンドボールに熱中し、協会役員となって活動する方も多い。（教員、保護者等）</li> <li>・小・中・高・一般とすべての種別において、協会スタッフが指導に関わっている。指導者がいない学校へは指導者を派遣し、小林市のハンドボールの発展に努めている。</li> <li>・地元で行われるイベント（日本リーグ等）、練習試合、公式試合とともに協会スタッフが関わり、その場において、協会スタッフと選手たちの人間関係が深められる。協会スタッフは子どもたちが小さいときから温かく包み込み指導していくため、子どもたちはのびのびと成長していく。中学生が県外流出しないのもそのあたりが大きく影響していると思われる。</li> </ul>
	外部指導者とのかかわり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小林市内に2校の中学校（小林・三松）があるが、どちらにも協会の方が外部指導者として指導している。昨年度、小林中学校の専門指導者が転勤したが、継続して外部指導者が指導しているため、引き継ぎもスムーズで連携が崩れることはない。</li> </ul>
指導者の対外的なかかわり	市協会主催行事（年4回）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本リーグ、技術講習会、コスマスカップ、連携パワーアップ事業及びふれあいハンドボールもしくはUMKスポーツフェスタなど各行事に関し、年間計16回程度会議を行う。（1行事につき4回ほど会議を行う。）</li> </ul>
	県外の中學・高校・大学との交流（年24回程度）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本渡中、大分国際情報、北陸、那覇西、国府、志布志、藤代紫水、九州学院、長崎日大、神戸国際、祐誠、千原台、松橋、香川中央、下松工業、福岡大等これらの学校に遠征に行ったり、または、小林秀峰高校に来たりして練習試合や意見交換・情報交換会（夕食時）等を、積極的に行っていている。</li> </ul>
	県内の小中高への講習会や訪問指導（年20回程度）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小林市（小林小、三松小、小林中、三松中）や宮崎市（広瀬小、田野地区）など、これらの地域へ生徒を連れ訪問指導をしたり、小林秀峰高校に練習に来てもらったりして連携をとっている。また、JOC中学選抜の指導にも積極的に関わっている。中学校は遠慮して高校への練習に参加しづらいが、高校の指導者から声を掛け、いつでも練習に参加できる雰囲気づくりをしている。</li> </ul>

(4) 私立の中・高併設校に対するアンケート

考察

中高連携の在り方を「私立中高併設校から学ぶ」という視点で、アンケートを行った。その中で練習時間や施設においては、公立校と同じ「不足しているが、工夫して練習を行っている」という回答が得られた。

また、公立校の指導者に「体格差・技能差」について悲観的な意見が多くみられる中で、私立校の指導者からは「中学生は“幼いから”という思いこみが甘やかしの指導にならないように、心身の成長著しい発達段階を考慮した上で、中学生の理解力・行動力に期待し、高校までの6年間を見通した指導を計画的に行っている」という特徴的な意見がみられた。

これらのことから、幅の広い異年齢集団を育成するがゆえの難しい側面もあるが、中高連携を図る上で選手の発育・発達段階に応じ、将来を見通した計画的な指導も必要な要素ではないかと考えられる。

## (5) 県内 22 競技団体・協会に対するアンケート 考察

「競技力向上の必要性や競技力向上における中高連携の重要性について」の問いには、22 団体すべて「はい」と答えており、協会が中高連携に関わることの重要性についても 21 団体が「はい」と答えているが、「実際に中高連携に関わっているか」の問いには「はい」が 11 団体、「いいえ」が 2 団体、「どちらともいえない」が 9 団体と半分が中高連携に十分に関わっていない状況にある。「どちらともいえない」と答えた団体が中高連携に加わってくれることで、より効果的な中高連携を行うことができるのではないかと考える。

また、「異動に伴う、指導者不在の事態に小林地区のハンドボール協会は上手く対応していますが、貴協会（連盟）はどう対処していますか」の問いには、「派遣コーチとして専門の指導員を送り込む体制ができている」（ラグビー）などの意見があった。しかし、対応ができていない意見の方が多く、例えば、「うまく対処しているとはいえない。以前より強化会議等の場で、中学校の指導者の適正配置について要望しているが、難しいようで実現していない。指導者がいない中学校の選手達は小学生のジュニアクラブに所属し通ったりしている。また、所属の中学校とクラブ、指導者間での転轍が生じ、なかなかうまくいっていない現状もある」（陸上競技）や「中学校等については、道場と連携をとっているので、中学校教員の異動そのものを考えて欲しい」（剣道）などの意見があがっており、中高連携において協会とのかかわり方に改善の余地があるのではないかと考える。

### 7 研究のまとめ

平成 21 年度の中学校部顧問の調査結果から、部活動の果たす、生徒の心や身体の成長への効果や意義について、中学校の現場でその必要性が認められ、更に競技力向上の必要性を感じ指導していることがわかった。しかし、指導者の中には、未経験の種目を指導している上で技術指導の不安など、問題を多く抱えている指導者も多くみられた。

そこで、平成 22 年度は、それらの問題を解消できる手立てとなるような事例を挙げるため、宮崎県内で中高連携が機能している競技団体・地区に焦点をあてアンケート調査を行った。各団体とも、限られた場所や厳しい予算の中で工夫しながら活動しているのが伺えた。

特に、小林地区のハンドボールの調査からは、協会と非常に好ましい関係を築いているのが伺える。教員の異動に伴う指導者の不在などに対しては、外部指導者が引き継いで対応していたり、指導者を派遣したりして対応している。また、指導・競技が経験、未経験を問わずハンドボールに関わる人を大事にしており、協会や地域で上手く選手や人を包み込んでいると思われる。また、中高一貫校のアンケートでは、公立同様、経済面、環境面での苦労は変わらなかったが、「競技力向上」という視点においては、無駄を省き練習に工夫をしている点がみられた。

本県の国体での競技得点を見ると、少年種別が多くを占めており、このことは、学校部活動の成果であると言えるのではないだろうか。今回の調査を通して、公立、私立問わず、どの競技も環境的要因（環境・場所）や経済的要因（強化費）を改善するには厳しい状況にあると思われる。しかし、指導者の資質向上や指導者間の連携においては、今回調査対象となった地域や学校に学ぶところがあった。

これらの調査結果から、競技力向上を推進していくためには、人的要因において、まだ改善の余地があり、この点からアプローチしていくことが現実的であり、有効だと考える。さらに、本県の競技力向上の一手段として、よりよい中高連携の在り方として提言するならば、①競技経験を活かせる教員の異動に対する配慮と中学校の強化推進校の在り方を見直すこと、②中学・高校・協会が情報を共有する機会を定期的に設けること、③中高連携の重要性を再認識し、組織的・継続的に活動していくこと。この三つの提言が、今後の競技力向上を進めていく上で重要な視点になるのではないかと考える。